書き下し
長編推理

死体は二度消えた

鷹見緋沙子

長編推理
書き下し

死体は二度消えた

鷹見緋沙子

立風書房

鷹見緋沙子（たかみひさこ）
昭和18年生。東京女子大中退。
神奈川県在住。
作品『わが師はサタン』（立風書房）
『最優秀犯罪賞』（立風書房）

死体は二度消えた

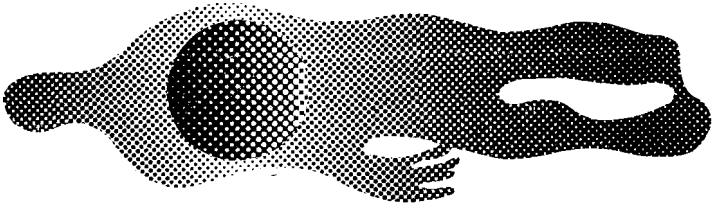
1975年6月10日　第1刷発行
1977年12月1日　第4刷発行

¥ 780

死体は二度消えた
著者＝鷹見緋沙子
発行者＝下野　博
発行所＝株式会社立風書房
東京都品川区東五反田三―六―一八
電話＝東京（四四七）一一九一（代表）
振替＝東京五―七四四九三
印刷所＝壮光舎印刷株式会社／株式会社美術版画社

（乱丁本・落丁本はお取替えいたします）〇〇九三―R六六一七―八九〇九
Printed in Japan 1975 ©

一章＝密室で消えた＝5
二章＝幻の死体＝29
三章＝鍵穴に死角が＝69
四章＝盗作の汚名＝95



五章＝殺人劇の裏方＝123
六章＝不可能犯罪と罠＝151
七章＝残された活路＝182
八章＝悲しき退場＝210

装幀　玉井ヒロテル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

死体は二度消えた

一章　密室で消えた

1

港区南麻布にある小公園。周囲を、小ぢんまりしたビルやマンションが取囲んでいる。時刻は、午後十時二十分。あたりには人影もない。

音を殺すようにして、一台の乗用車が近づいてくると、公園わきの暗がりに停まって、ヘッドライトを消した。サニー一二〇〇クーペGX、全長四メートル弱の小型車である。

乗っているのは、運転席にいる若い男だけだ。彼は車内灯の消えた暗い車内から、注意深くあたりを見回している。チャコール・グレーの地味なスーツ。濃いブルーのカラーシャツに、同系色のストライプタイ。黒縁のメガネをかけている。

髪はやや長目だが、櫛目が入っていた。色は白い方で、額は広い。鼻筋も通り、整った顔立ちである。理智的な反面、何となく気の弱そうな感じもする。どこにでもいる平均的サラリーマン、というのが、彼から受ける印象であった。

事実そのとおりなのである。彼、竹村則久は、三英商事株式会社の営業二課に籍を置く、二十八歳の独身社員だった。だが、今夜の彼の目つきは、いつもの穏かな色合いとは違い、かなりの緊張感をみなぎらせていた。

竹村は、服のポケットに手を入れると、白いビニールのロープをつかみ出した。長さは一メートル、直径は七ミリほどである。

念のため、両の手で強く引っぱってみて、どれほど力を加えても切れる心配のないのを確かめる。ロープを元のポケットに納め、周辺に人の目のないものを見届けてから、車のドアを開けて外に出た。

九月なかばの夜空はどんよりと曇っている。初秋の気温は肌に快適なはずなのだが、竹村はいくらか汗ばんでいた。心臓の鼓動も、早くなっている。足早に公園を抜け、人通りの絶えた裏道を選んで、目的の場所に近づ

く。五分ほどで竹村は目ざす建物の裏手に着いた。幸い誰にも出会わなかった。

建物は五階建てで、明治通りから引込んだ二車線幅の自動車路に面している。ここは竹村の勤め先、三英商事の本社ビルなのである。もっと言えば、今夜も午後八時まで、彼が執務していた場所だ。つまり竹村は、八時に退社したあと、こっそりと引き返してきたわけだった。

ビルの中では、竹村の直属の上司である古川忠営業二課長が、まだ三階の部屋で残業を続けているはずであった。

竹村は、誰もいないがらんとした営業部室で、ひとり幅広い課長デスクに向かっている古川の様子を思い浮かべた。

(古川の白ブタめ!) 竹村は腹の中で罵声を浴びせる。憎んでも余りある相手なのだ。

(まずおれは、隣室にそっと入って、鍵穴から彼が単独で執務している姿を確認する。それから、忘れものを取りに戻った振りをして、おれは室内に入ってゆく。やつのことだ。嫌な目つきでおれを睨み、何を忘れたのか聞くだろう。おれは自席デスクの引出しを開け、財布を取出して、彼に示す。

「レストランで食事をしたのですが、支払いをする段になり、うっかりこれを社に置忘れてきたのを思い出しまして」

おれの説明に、きっとやつはお説教じみた言葉を返してくるだろう。

「だらしのない男だねえ、君は。私生活の方も、勤務状態と変わらないらしい。もっとしっかりしなくては、役に立つ人間にはなれないよ」

「申し訳ありません、課長。以後は気をつけます」

おれは素直に頭を下げる。相手に、こちらの殺意を見破られては、計画は破綻してしまう。そして次に、ふと思いついたような表情で言葉を改めるのだ。

「実は先日から、課長のお耳に入れようと考えていたことがあるんです。そこの資料を見ていて気づいたのですが」

おれは、課長席の背後にある資料ロッカーを指さし、その方に向かって歩き出す。

「何だね、君。面倒な話なら、明日にし給え。ぼくは今、残業で忙しいんだ」

眉をひそめて、やつは自分の仕事に戻るだろう。おれは、彼のそんな態度にはお構いなしでロッカーの前に進む。資料の件などは、むろん口実だ。おれの狙いは、やつの背中に回りたいことにある。おれはポケットのロープをそっと出すと、いきなり後からやつの首にそいつを巻きつける。声を立てる余裕もなく、やつは息の根を止められてぐったりする。四十一年間の彼の人生も、あえなく部下の手によって終末を迎えるのだ。

ざまを見やがれ、とおれは床に転がったやつの死体を小気味よげに見おろす。背丈はないが、丸々と脂肪のついた古川のからだは、まさしく白ブタのあだ名にふさわしい。おれはしばらくの間、やつの死体に向かって、今までの恨みつらみを浴びせかけるだろう。それから、おれが会社に立ち戻った痕跡が残っていないかを念入りに確かめ、殺人現場から立去るのだ)

竹村は、建物を見上げながら、殺しの情景を生々しく空想した。

だが彼は、すぐ気を取り直して、想像の世界から現実に立ち返った。こうしている姿を誰かに見られては、今夜の計画も変更せざるを得なくなる。とりわけ警戒を要するのは、三英商事が契約している三人の夜勤ガードマンであった。彼らの社内巡回時刻は、前もって調べてある。しかし油断をしていると、思わぬ場所で彼らの目に触れてしまう危険がある。

竹村は行動を開始した。隣のビルとの狭い路地を奥に進み、やがて一点で立ちどまった。三英商事ビル側の一階の壁は、大型の窓になっていて、分厚いすりガラスがはめ込まれている。ここは、男子トイレの外側に当たるのである。昼間でも、せいぜい掃除の時を除いて、滅多に開けられることはない。明り取りと、緊急時の脱出口の役を果たしている窓であった。竹村は、ポケットに用意した薄い手袋を取出すと、両手にはめた。指紋を残さないためである。窓に近づき、下から上にもち上げるように力を加える。

上下に開閉する式の窓である。本来なら、内側から施錠してあるのだが、竹村は退社前、こっそりと鍵をはずしておいたのだ。ガードマンが、営業時間終了後、最初に社内の戸締りを点検するのは、午後七時半から八時までの間だ。竹村は彼らの見回りが終った直後、この鍵を操作した。その目的があったからこそ、今夜はわざと仕

事を残して残業した。

トイレの窓は開いた。竹村はその隙間から、からだをビルの内部に滑り込ませた。素早く窓を閉め、内鍵もかけておく。

トイレの床面はコンクリートだが、明りが消えているので、まっ暗だ。だが内部の構造は、頭の中に叩き込んである。竹村は、忍びやかに、しかも敏速に動いた。靴はラバーソールを履いてきている。足音を立てる懸念はなかった。

ドアを押して廊下に出る。夜間照明用の薄暗い天井の光源が、ぼんやりあたりを映し出している。

トイレ前から五メートルほど行くと、左に折れる曲がり角に達する。そこから幅のある廊下が直線状に長く伸びる。その廊下をさらに五メートルばかり進むと、右側に階段の昇り口がある。

曲り角に達した竹村は、長い廊下に人気(ひとけ)がないのをよく確かめた、遙か突当たりの辺には、明るい光が洩れている。その近くに、ガードマンの詰所があるのだ。

曲り角から飛出して、一気に階段に近づこうとした竹村は、瞬間、身を固くした。突当たりの光の中に、ガードマンの人影を見たのである。

(見られたかもしれない)

と彼は思った。竹村は半身を乗出していた形だったし、先方は何かが動くのに気づいて、こちらを見たような気配だった。

(計画を中止して、今夜はこのまま引返そうか)

とも考えた。だが、まだ計画実行の未遂段階だから、かりにガードマンに見咎められたとしても、言い訳はきく。しかし、忘れものを取りに戻ったという弁明ぐらいでは、かなり不審に思われるだろう。夜間の出入口は、ガードマン詰所の前にある。そこを通らなかった竹村が、いったいどこから入ったのかという疑問を、まず彼らは抱くに違いない。

(今のおれは、犯罪者なのだぞ。そんな弱気を出してどうする)

竹村は思い直して、自分を叱りつけた。危険は最初から承知の上で、今夜のこの計画に踏み切ったのではないのか。

やがて竹村は、曲り角から、ほんのわずかに目だけを出して、もう一度、廊下の先をのぞいた。光の下に、ガ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ードマンの後姿が見えた。竹村の推察通り、彼は異常らしきものを認め、それを確認する目的で、こちらの方に向かってきたのだ。だが途中で、錯覚だったらしいと考えを改め、反転して引返すところらしいな、と竹村は状況を判断した。

今だ！ と竹村は思った。とたんに勇気が湧いた。彼は曲り角を離れ、急ぎ足で階段の昇り口に向かった。もしガードマンが振り向けば、一切は終りである。足がつまずいて音を立てても、すかさず発見されてしまう。

どうやら無事に取りついて、手すりの陰に身をひそめる。一息つくと同時に、冷汗が流れるような安堵感を味わった。

2

何とか、一階の関門を越したのである。あとは、それほどの危険もなく、三階に達した。どの階にも、明りの洩れている部屋はなかった。

毎週水曜日の夜、古川課長は遅くまで社に残る。残業の内容まではよく判らないが、竹村のカンでは、社の極秘事項を扱っているように思える。

三英商事は、資本金二億七千万、業種は鉄鋼、鉄鋼原料、機械類の輸出入を扱う専門商社である。古川は、社内切っての実力者、堀哲次専務の片腕として、将来を嘱目されていた。

確かに古川は、決断力や実行力に富むやり手には違いない。それは、竹村も充分に認めている。だが竹村がまんできないのは、彼の気の短さと、竹村に対する冷酷さであった。

古川の目から見れば、竹村のような行動性に欠けた人間は、クズのように映るのかもしれない。机の前でものを考えるのは得意なのだが、動くのは苦手なのだ。竹村はつくづく、おれはビジネスマンには向いていないと、心ひそかに嘆じていた。そんな竹村を、まるで恰好の獲物のように、古川はいたぶるのである。社にいる間は、古川に怒鳴り続けられているようなものだ。それも、からっとした怒声ではなく、ねちねちした陰性の虐め方なのである。

彼から見る竹村は、いわゆる性が合わない人間なのかもしれない。

面と向かっては反抗しないが、心の中で古川を憎んでいるのも、竹村の表情に現われるのだろう。古川は自分の内面に溜まったストレスの吐け口の対象として、手頃な竹村を選んだようにも思える。

竹村の課には、安部紀美子という女子社員がいた。年齢は二十三歳、際立った美人ではないが、可愛らしい顔立ちで、明るい性質の持ち主だった。二人はお互いに好意を感じはじめ、やがて親密の度を深めていった。決して社内では、ほかの同僚たちに目立つような振舞いはしなかったのだが、課長補佐の北原伸夫が、彼らの恋の進行度を、敏感に見抜いたようであった。

北原は三十二歳になるが、まだ独身である。そして紀美子に、以前から何かと触手を伸ばしていた。その紀美子が竹村と結ばれたと知ると、卑劣にも意趣返しの行動に出てきた。それも、北原らしい手の混んだやり方だった。彼は、古川課長の腰巾着的な存在なのである。上手に古川をそそのかし、竹村が古川に叱責されるような状況を、たびたび作りあげた。

北原も嫌なやつだが、竹村には古川の方が数段憎い。竹村の失策を、わざと紀美子の前で責め立て、自己の嗜虐性を満たそうとするからだ。ぶざまな姿を、恋人に見せつけなければならない竹村は、屈辱で身が裂ける想いである。北原は古川のそうした性格を見抜いた上でことを運び、恋の恨みをはらそうと企んだのだ。

辛いのは、竹村だけでなく紀美子も同様だった。彼女は居たたまれなくなって、半年ほど前に社をやめ、別な勤め先に移っていった。

古川によって無能社員の烙印を押された竹村だが、紀美子の彼に対する愛情は変わらなかった。二人の仲は、今でも続いている。しかし竹村にとって古川は、いっそう憎悪の固まりになった。

(このままですまされるか。いつかはきっと、何かの形で思い知らせてやるぞ)

あれやこれ、恥や怨みに耐えながら、竹村は呪いの言葉を胸の中で繰返してきた。長い間に蓄積された根の深い憎しみが、遂に今夜のこの計画につながったのである。

三英ビルを上から見ると、南北の方向に細長い形状をしている。三階は、東側の側面に沿って、直線状の廊下が伸びている。階段は南と北の端についているが、今、

竹村が昇ってきたのは、南側階段の方であった。

廊下の右側には、ところどころに明りとりの窓を持った壁があり、左側には各室のドアが並んでいる。竹村は、廊下をまっすぐ突き進んだ。どの部屋も明りが消されているのだが、奥の一部屋だけは、光が洩れている。そこが営業二課で、電灯がついているのは、古川がまだ残業を続けている証拠なのである。

エレベーターを左に見て少し行くと、営業一課の部屋がある。ここは、古川のいる二課の部屋と隣接している。竹村はそっとドアを開け、室内に身を入れた。

光の環が拡がらないよう、レンズの部分を黒い布で覆った小型の懐中電灯を、竹村は用意してきた。薄い明りを頼りに、まっ暗な部屋の中をそろそろと歩む。配置されたデスクや椅子に触れて、万が一にも物音を立てるようなことがあっては、竹村の計画は取返しがつかない。

残業中の古川が、隣室の物音に気づいたとする。この時間、社内には彼を除いて社員はいないはずである。古川は不審に思い、席を立って調べにくるか、あるいはガードマンに連絡をとるだろう。どちらにしても竹村は姿を発見されてしまう。そうなったが最後、彼はもう引っ込みがつかない。今夜のこの計画は、そっくり台なしになってしまう。

(ここまでうまく運んできた計画だ。うっかり音を立てたら、苦心は水の泡になるぞ)

竹村は慎重に足を運び、この部屋と二課とを仕切る壁に近づいていった。竹村の目ざしているのは、その壁の中央部に取りつけられたドアなのだ。ドアの把手の下には、鍵穴がついている。

竹村の今夜のこの計画とは、ドアの鍵穴を通して、残業中の古川の姿を、こっそり観察するだけにあった。そしてそれ以上の行動に出ることもなく、そっと退去してゆく。

では、彼の胸に激しく燃えている古川への殺意は、どう処理をつけるつもりなのか。彼のポケットに納められた白いロープ――絞殺用の兇器は、何のために用意されたものなのか。

実を言うと、竹村は今、空想殺人を行なっているに過ぎないのだ。むろん、上司の古川を殺したいほど憎んでいる。しかし平凡なサラリーマンであり、かつ常識人で

ある竹村には、その殺意を実行に移すほどの度胸など、最初から持ち合わせていなかったのである。
ではなぜ、ガードマンの目を盗み、古川の耳を恐れながら、深夜の侵入を敢行したのか。
それには、次のようないきさつがあった。

3

二か月ほど前、七月のなかばだった。ある夜、竹村は紀美子と、日比谷公園で待合せをした。紀美子は三英商事を退社したあと、小さな広告代理店に勤めを替えたのだが、しかしその後も二人は、こうしてひんぱんにデートを重ねていたのだった。
噴水池を囲んだ円形広場の一隅が、約束の場所であった。
紀美子の方が先にきていた。竹村は彼女の姿を認めると、急ぎ足で彼女に近づき、肩をすり寄せるようにして、ベンチに並んで坐った。
夏の日比谷公園は、アベックの天国である。しかし濃厚なカップルは、光の届かない茂みの奥に消えてゆくから、明るい広場を占めているのは、比較的うぶな恋人たちと言えるだろう。
噴水は、噴き上げる水の高さが多様に変化するし、それと同時に色電球の作用で水の色までが美しく変わる。変幻自在な水の芸術を、紀美子と眺めているだけで、竹村は幸せだった。
が、それは心の底からの幸せとは別なものであった。いっときの幸福感に酔っているに過ぎない。竹村は、紀美子のハートを、まだがっちりと掴んだわけではないのである。甘い言葉を、彼女にかけて、もっと手ごたえのある愛のムードを作りたいと思うのだが、それには竹村の心に抵抗があった。
「ねえ、ぼくは考えるんだが」こんな話題は、デートの場にはふさわしくないと思いながらも、竹村は切り出さずにはいられなかった。「ぼくの性格は、どうもサラリーマンには向いてないらしい」
「そうかしら」
紀美子の目は、噴水から離れて竹村の横顔に注がれた。
「間違いなく、そうだよ。組織の内部にしっかりと組込

まれ、上司の命令のまま、個性を殺して酷使に甘んじる生活なんて、耐えられない気がするよ」
「でも、世の中の人は、大半がサラリーマンだわ。あなただって、もっと別な職場にいたら、考え方が変わっていると思うけど」
今の会社が、どれほど居心地が悪いかは、説明しなくても紀美子にはよく判っているのだ。
「いや、そうじゃないよ。性格や能力が勤めに向いているんなら、どんな制約の下にいたって、それなりの実績をあげるさ。会社側に有能な社員と認められたら、相応の待遇も受けられて、ぼくの人生観も変わるはずだよ。とにかくぼくは、サラリーマンが嫌なんだ」
職業に情熱が抱けなければ、勤務成績が落ちるのは当然だろう。その結果、昇進度も鈍くなる。そこで彼の勤労意欲は、いっそう殺がれてしまう。こうして、悪循環が繰返され、ますます竹村はサラリーマン稼業への嫌悪感を膨らませていったのだ。
「どうかしら、思い切って勤め先を替えてみたら？　案外、生活が楽しくなるかもしれないわ」
紀美子は、真剣な表情で言った。彼女の思いやりは嬉しかったが、竹村は弱々しく首を横に振った。
「だめだね。何度も言うように、ぼくは生れつき勤めには向いていない人間なんだ。他人に頭を押えられるのは耐えられないし、だからと言って、おべんちゃらを言うのはどうしてもできない。特別な能力でも持っているのなら別だが、どこの組織に入っても、いずれは不平が頭をもたげてくるだろうな」
「あなたの性格では、そうなるかもしれないわ」
紀美子は反撥しないで、自身に言い聞かせるように低い声でつぶやいた。
「せっかくのデートだというのに、こんなつまらない話を持出して、君にはすまない、と思っている」竹村は愛のこもった目で紀美子を見つめた。「誰にも打明けられない悩みごとを、君だけには聞いてほしい、という甘えのせいかもしれない」
紀美子の手を竹村は固く握り締めた。
「それより、ぼくは一日も早く、君に正式に結婚を申込みたい気持ちなんだ。でもぼくが、不安定な状態で職場にいたのでは、長い将来にわたって君を幸福にできる自信はない。ほかの会社に移ったとしても、やはり同じ問

題に突き当たると思う。そうなると、いつまでも、君にプロポーズする資格が作れないわけさ。ぼくにとっては、それが深刻な苦しみなんだ」

「嬉しいわ。あなたが私のことを、そこまで真面目に考えてくださるなんて」

竹村を見返した紀美子の瞳には、感謝の想いがあふれていた。

「残る手段は、サラリーマンをやめて、まったく別な職業への転職なんだけど、具体的にどの道を選ぶかとなると、むずかしいんだなあ。ぼくは何の取柄もない人間なのでね」

ほっ、と竹村は溜息を洩らした。

「実はね、今夜はぜひお話したいことを持ってきたの」

不意に、紀美子は表情を輝やかせて言った。

「何の話だね、急に言い出したりして」

「今のあなたの気持ちを聞いて、これはとてもいい知らせになりそうに思えてきたわ」

「もったいぶらないで、早く教えてくれないか」

竹村は、紀美子の方にからだの向きを変えた。

「今日の午後、私、あなたのお友だちの沖田さんに、偶然お会いしたのよ」

「へえ、沖田にか。どこで?」

「あの方の勤めている出版社でよ。私、あなたの学生時代の話、いろいろと聞いちゃった。あなたに文学的な才能があるなんて、それまで少しも知らなかったわ」

紀美子は、弾んだ声で言った。

「少し順序を立てて話してくれよ」

「ええ。私、広告代理店にいるでしょう。で、業務上の用件で、皇水書房に行ったのよ。広告部をたずねて用をすませ、社の玄関口に引返したら、そこでばったり沖田さんと。私、あの方がその出版社にいるのを知らなかったものだから、びっくりしたわ。沖田さんの方だって、まだ私があなたと同じ会社に勤めていると思っていたのね。だからお互いに、意外な出会いになったわけよ」

沖田良樹は、竹村の大学時代の親友である。しかし現在では、同窓会で顔を合わせたり、時おり時候のあいさつ状を交換するていどの交際しかしていない。

ところが今年の二月の夜、銀座の街頭でたまたま出会った。ちょうど竹村は、紀美子を連れていた。社の同僚だと言って彼女を紹介したのだが、沖田の方は、二人の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.